

「楽しい体育」論と学校経営

森脇 逸朗（京都市立桂小学校）

1. 「予測が困難な時代」の学校経営

情報化やグローバル化といった社会的変化の速さが加速度的となり、「予測が困難な時代」になっていくと言われています。このような時代を迎えるこれからの学校教育はどうあらねばならないのでしょうか。

中央教育審議会では、「生きる力」をより具体化して、資質・能力を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、そして各校のカリキュラムマネジメントによる方策を打ち出していますし、新学習指導要領では、「学びに向かう力」という表現も使っています。

今後ますます、学校での学習内容を修めるだけでは通用しなくなり、「生涯学習」がさらにクローズアップされるのでしょうから、「学びに向かう力」や「主体的・対話的で深い学び」が必要で大切なことはよくわかります。しかし、そういった力や学びの実現にはどうすれば辿り着くのでしょうか。

2. これまで気になっていたこと

私はこれまでの歴任校で、「学力向上」や「基礎基本を徹底する」ことに全力で取り組んできました。そして、そういった取り組みは結果となって現れもしてきたと思います。

しかしある日、児童の姿が大変気になりました。「うつむき加減」で登校してくるのです。ピカピカのランドセルで希望に満ち溢れて入学してきた1年生の中には、数年たつと「仕方なく」とか「がまんして」学校に来ている児童もいるのではないのでしょうか。

これでは卒業してもなお、「生涯を通して学ぼう」とすることは難しいに違いありません。

3. 「楽しい体育」論の可能性

「楽しい体育」論と呼ばれる体育科の学習指導理論があります。私は今年度 37 年間の教員生活を終えますが、この間にこの理論の確かさや先見性に触れるたび、体育科に限らず、グローバル化の進む今日にこそ、他教科や学校経営についても広く示唆に富むものであることを実感してきています。

(ア) 生涯スポーツ 「学びに向かう力」

「楽しい体育」論は、「生涯スポーツ」を目指しています。児童・生徒が自発的にスポーツを行おうとするには、スポーツの「楽しさ」を体験していて、スポーツが「好き」になっていなければなりません。

同じように、生涯にわたって自発的に「学ぶ」ためには、「学ぶ」ということの魅力を知っている（内発的動機）ことが不可欠です。

(イ) 目的・内容論

また、「楽しい体育」論には、スポーツの行い方について、「手段的」、「目的的」といった視点で捉える考え方があります。

人は、何かを獲得するために「ある事」を行うこともあれば、「その事」を行うこと自体が目的であり内容であることがあります。

「あそび」は、それ自体を目的・内容として行います。将来必要になるから、「ままごと遊び」をするのでもなければ、「仲良くなる」ために遊ぶことはありません。「眼球の訓練」をするために「ゲーム」をしているわけではないのです。

「体育」はこれまでの歴史のなかで、「強靱な兵士の育成」や「体力の向上」、「民主的な態度の育成」を目的として、その達成のための「手段」として扱ってきた経緯をたどってきていましたが、「生涯学習」の必要性が叫ばれるようになると共に「生涯スポーツ」への指導として、学習指導要領の目標にも「親しむ」という表現が使われ始め、それまで「手段的」に扱われてきたものがスポーツを「楽しむ」こと自体を目的や内容へと盛り込むようになってきました。

「楽しい」からスポーツを行い、その結果として「体力」や「技術」も向上するし、「お友達とも仲良くなる」のです。

(ウ) 学び方の学習 主体的な学習

「楽しい体育」論では、児童が主体的に学習できるように、単元の計画や時間の使い方、学習の場の準備や後始末の方法、安全面やゲームや運動の進め方等の「学び方」の指導を精選して、単元のはじめの段階で行います。

その後は児童の学習の様子を観察して、必要に応じ、個別やグループ別あるいは全体へと対象も絞りつつ、指導やルールへの補足や修正を加えていきます。

児童は自分たちで次のめあてを考えて、ゲームや運動に臨み、その後ふりかえって次のめあてを考えます。

桂小の玄関を入ったところには、「ノート名人」と題して児童のノートが掲示され、紹介されています。これは各児童が、「家庭学習」の内容として、学習の復習やさらに調べたことを自分で計画してまとめたものです。

桂小の3年生以上で取り組んでいる「家庭学習」は、自分で内容や時間を計画し、実行できたかどうかを自分で振り返り、さらにそれをもとに次の日の計画を立てています。

こういった「自学自習」の指導は、桂中ブロックの桂川小や桂徳小でも取り組んでおり、桂中では、定期試験の前などにテスト準備が計画的に自分で進められるように活用しています。

「主体的な学習」、「生涯学習」へとつながる「自学自習」の方法を小・中連携して実践しているわけです。

(エ) フロー理論 今の力を認める 個人差

「得意な子」だけではなく、みんなが楽しめるような個人差に対応した指導が大切です。

個人差があるのは当然です。難しすぎては「不安」になるし、逆に簡単すぎては「退屈」してしまいます。個別にちょうど良い課題があるはずですよ。

また、みんなが「ナンバーワン」になる必要はありませんから、他者との比較は不要です。自分の「今、現在の力」からスタートして、ちょうどよい課題に挑戦していく中で、たとえ少しずつでも伸びたり、「できないこと」が「できる」ようになったりすることはこの上ない「喜び（楽しさ）」ではないでしょうか。それがまたさらに次への挑戦欲求となって、「深い学び」につながっていくのだと思うのです。

これはチクセントミハイという方が唱えた「フロー理論」というものですが、彼はまた、同じ課題でも意識を前向きにすることで、この喜びの連鎖へとつながるといいます。このことから「主体的に」ということの大切さは実感できると思います。

4. 「楽しい学校」

「楽しさ」を知り（体得し）、「楽しみ方（学び方）」

を知ることこそ、「学びに向かう姿勢」が育ち、生涯を通して学び続けるのだと考えています。

桂小学校の「楽しい学校」という「目指す学校像」や、「心豊かに楽しく学び続けるかつらの子」という「学校教育目標」は、こういった考えを拠り所としています。

この「楽しい」は「教科・領域の学びの魅力」と「お友達」を指しています。

先日の運動会やこれから取り組む「かがやきフェスティバル」（学習発表会）など「仲間」と一緒に取り組むことで、一人では成し得ない大きな感動や喜び（学び）も達成できます。これこそが、共同学習の魅力であり、「学校の存在理由」でさえあると考えています。

児童は、「楽しいこと＝学習内容」に導かれ、「お友達」がいるから学校に来るのだと思うのです。

指導者は、教科・領域の魅力を児童・生徒に伝えることができるように教材研究や指導方法の探求に取り組みます。教職員集団がお互いに高め合うことや教材研究の広がりや深まり、自身の指導力向上自体が教師としての「楽しさ」につながることで、自発的研修が進むことを願っています。

5. これからの展望

このように、児童一人一人の今現在の力を認めることは「自己肯定感」につながるでしょうし、個別の実態に合わせて、「今現在の力」から学習を始め、適切な課題を用意することや、「みちすじ」や「学び方」を示すことで、指導者の指示のみではない、「学習の魅力」に導く自主的で自発的な学習を仲間との関わり合いの中で構築していこうという「楽しい体育」論の考え方や行い方は広く学校教育に応用できる可能性を秘めています。

これから先、どうなるか先が読めない時代が来るといいますが、これは、「不安」なことでしょうか。学びの魅力を知っている者にとってはむしろ「楽しみ」ではないでしょうか。同じ状況を不安・負担ととらえる者とは違い、学びに「前向き」になれる者にとっては、「未知」は「魅力」です。「できない」ことは、「ダメ」なことではなく、「可能性」だと考えるのです。

2018. 10